

Cast Party 2016 (Jp)



Told by Ryusui Seiryoin, Ryosuke Akizuki, Agent Kunugi, and Tanya

Character Illustration by Kai Chamberlain and Polka D

Cover design by Tanya

Copyright © 2016 The BBB: Breakthrough Bandwagon Books

All rights reserved.

ISBN: 978-1-365-64527-3



The BBB ウェブサイト（日本語版）

<http://thebbb.net/jp/>

Ryusui Seiryoin 清涼院 流水	Ryosuke Akizuki 秋月 涼介	Agent Kunugi エージェント エド	Tanya ターニャ
---------------------------------	-----------------------------	---------------------------------	---------------

清涼院流水

<http://thebbb.net/jp/cast/ryusui-seiryoin.html>

秋月 涼介

<http://thebbb.net/jp/cast/ryosuke-akizuki.html>

エージェントエド（くぬぎ）

<http://thebbb.net/jp/cast/agent-kunugi.html>

ターニャ

<http://thebbb.net/jp/cast/tanya.html>

0. 今年はスペシャル・ゲストを招いて

Akizuki



Ryusui



Kunugi



Tanya

清涼院流水（以下、流水）：皆さん、こんにちは。ぼくは、The BBB 編集長の清涼院流水です。われわれ The BBB: Breakthrough Bandwagon Books は 2012 年 12 月から活動を始めて、おかげさまで、今年、2016 年 12 月に 4 周年を迎えられました。2013 年の 1 周年と 2014 年の 2 周年では、作家さんと読者の方たちがリアルの場で交流するイベント、「Cast Party with YOU」（愛称: キャスパ）を開催しました。ただ、リアルのカスタパは、参加していただける人数が非常に限られてしまうため、去年は初めて電子書籍のコンテンツとして「Cast Party 2015」を収録し、発表しました。無料の電子書籍で、なおかつ YouTube にも音声アップしましたので、リアルイベントよりもかなりたくさんの方に、読んだり聴いたりしていただきました。それなりに成果はあったと思います。前回、「Cast Party 2015」のラストで「来年（2016 年）はリアルでキャスパを開催できるかな？」と疑問形で語ったのですが、今年も読者の皆さんにお伝えしたい話が多くありますので、よりたくさんの方に届くように、電子書籍にしたほうがいいだろうと思いました。今年の「Cast Party 2016」も、去年に引き続いて電子書籍のコンテンツとして座談会を収録します。この音声は、昨年と同じく、後日、YouTube にもアップする予定です。今年

のキャスパも昨年同様、The BBB の校正責任者のエージェント工刀(くぬぎ)さんと、チーフ・デザイナーのターニャにも参加してもらいます。

エージェント工刀 (以下、工刀) : 読者の皆さん、こんにちは。2016年のThe BBBは、かなり刊行作品数も多く、年始から年末まで、校正作業に忙殺され続けた1年でした。

流水: おっしゃる通りですが、ただ、工刀さんは、『Towerld (タワールド)』シリーズについては、校正者でなく、エージェントという接し方になりますよね。

工刀: ええ。『Towerld』については、私は、謎の著者「神狩り博士」の原稿を仲介しているだけです。あと、私事ですが、2016年の私の個人的な事件としては、思い切ってスキンヘッドにしたことでしょうか。

ターニャ: とてもお似合いですね。素敵です。

流水: スキンヘッドにされることは、以前から検討してらっしゃったんですか？それとも、今年のThe BBBの活動と何か関係があったのでしょうか？つまり、『Towerld』が10巻に到達して1冊の合本にまとまる、という大きな節目があったじゃないですか。それとスキンヘッドは関係あったんですか？

工刀: 特にないですね。私は著者ではなく、単なるエージェントですし。

流水: わかりました。では、ターニャからも、ごあいさつを。

ターニャ: 今年1年は、美術館のボランティアと、家庭教師をしていることによって、小学生とか中高生といった若い子たちの生活スタイルとか、今、流行っている価値観みたいなものを現場で見ることができたのは良い機会でした。あと、「ポケモンGO」で相棒をガーディ(犬によく似た外見のモンスター)にして、出無精がだいぶ改善されました。

流水: 昨年もおなじみのこの3人に加えて、今年はスペシャル・ゲストをお迎えすることになりました。作家の秋月涼介(あきづき・りょうすけ)さんです。

秋月涼介 (以下、秋月) : 皆さん、こんにちは。秋月です。最初におことわりしておきますが、私の英語の発音はかなり日本的で、うまく伝わるか自信がないのですが、その点は、どうかご容赦願います。The BBBでは、ミステリー連作の『The Gifted (ザ・ギフトィッド)』と、食りポの『The Sifted (ザ・シフティッド)』を発表しています(※註: 「gifted」は「能力者」、「sifted」は「ふるいにかけてられたもの」という意味です)。私は一応、正体を隠している「覆面作家」ですので顔出しはNGなのですが、この座談会は、公開されるのは音声だけで顔は出ないということで、参加させてもらいました。

流水: 秋月さんは覆面作家さんですが、2013年と2014年のリアル・キャスパには出ていただけましたよね。あれは、どうしてだったんでしょう……？

秋月: さあ、なぜなんでしょうか(笑)。

流水: 大人数でなければOK、ということでしょうか。

秋月: 写真はNGなんですけどね。派手に活動するのではなく、細々とやりたいので。2013年と2014年のキャスパについては、ごく内輪のイベントでしたし、写真NGの人は撮影されないということだったので、参加しました。

流水: 読者とリアルに交流してみたい、というお気持ちも少しはありました？それとも、編集長に強引に誘われたから、仕方なく出た、とか？（笑）

秋月: 交流してみたい気持ちは、ちょっとありましたね。

流水: 2014年のキャспаでは、秋月さんファンの熱心な女性読者が参加してくださっていて。懇親会でお話ししようと思っていたら、われわれThe BBB関係者がごあいさつする間もなくお帰りになられたので申し訳なかったです。

秋月: あの方には、ほんとに申し訳なかったです。録画されていたので、後ろも振り返れず…、懇親会でお話ししたかったのですが、機会を逃しました。

流水: 工刀さんも2014年のキャспаに参加されていましたが、その女性のことを、ご記憶でしょうか？かなり秋月さんの作品を読み込んでらっしゃる方で。イベント中に秋月さんの作品についてご質問されて、秋月さんもお答えになっていました。ぼくも秋月さんも、その方と懇親会でじっくりお話ししようと思っていたのですが、懇親会の前にお帰りになると事前に知らなかったのです。

秋月: すっと消えるように、突然、お帰りになりましたよね。

工刀: ああ、おぼえています。あまりにも一瞬だったので、だれかが幽霊を見たかのように言っていましたよね。それこそ、秋月さんの作品じゃないですけど。

流水: あっという間のできごとで、ごあいさつする間がなかったんです。The BBBとしても、たいへん失礼なことをしてしまったので、本当に申し訳なかったです。この場をお借りして、お詫び申し上げます。

秋月: その節は、申し訳ありませんでした。……って、あの方、これを聴いて（読んで）くださるのでしょうか。

流水: The BBBに愛想を尽かしていないことを、祈るばかりですね。もしまだThe BBBをチェックしてくださっている場合は、ぜひメールください。秋月さんに転送しますので。

ターニャ: あと、秋月さんの紹介としては、食べ歩き？ラーメンとか？

秋月: はい、食べ歩いています。ネットでリサーチしています。

ターニャ: 好きな食べ物は？最近ハマっているのは何ですか？

秋月: けっこう何でも食べますね。ただ、『The Sifted』の連載で、扱うジャンルが、ラーメン、和食、洋食、中華、カレーの順番で決まっているので、それは途切れないように気をつけています。

ターニャ: 食べ物以外に、他の趣味はありますか？

流水: ほんとはスピリチュアルな本が大好きです、とか？いきなり言うと、あやしい人と思われそうですが（笑）。

秋月: スピリチュアルも大好きです（笑）。でも、どちらかというところ、この世界の構造が、どうなっているのかの方に興味がありますね。

流水: 秋月さんの作風については、のちほど、また改めて掘り下げたいと思います。ちなみに、ぼくはまだ疑っているんですが、実は、エージェントの工刀さんが「神狩り博士」本人じゃないんですか？

工刀: 違います……というか、「神狩り博士」という人物は存在しないんです。これは自然現象みたいなもので。台風とか地震とか、宇宙で言う cosmic wind——太陽風——のような自然現象なんです。

秋月: 存在しないんですか!?(笑) では、工刀さんは、どこから原稿を手に入れているんですか？

流水: メールが、どこかから送られてくるんですけどっけ？

工刀: ええ、そうですね。霊界通信みたいなメールが、どこからともなくやってきて、それを私は右から左に流水さんに転送している。それが『Towerld』。

秋月: そうだったんだ……。

工刀: そういうことにしましょ——いや、そうなんです。はい。

秋月: 知らなかった……。

工刀: 本人が言ってるんだから、間違いないです。

流水: 去年の「Cast Party 2015」は、キャスパとしては初めての電子書籍ということで、The BBB がスタートした 2012 年から 2015 年末までの全コンテンツと全著者について語りました。それもあって、かなり長くなりましたね。今年は、2016 年に刊行したコンテンツとその著者にトピックをしばって語ろうと思います。ただし、話が膨らんだ場合は、過去の作品に触れるケースもあるかもしれません。

工刀: 了解です。

流水: われわれ The BBB は、このように小さな規模で活動していますので、通常ですと、新刊は月に 1 作品だけです。つまり、英語版だけなら 1 冊で、日本語版も一緒に出す時には月に 2 冊出す、ということです。これが、The BBB の基本です。ところが、たまたまスペシャルな企画が重なって、月に 2 作品出す時は、月に 4 冊、最大で刊行することになります。月に 4 冊となると、ぼくと工刀さんの作業量がかなり多くなり、物理的に大変で時間に追われるのですが、今年は、自分たちでも驚くほど多くの点数を刊行しました。ピークとなった 2016 年 3 月は、ひと月に 11 冊も出すことになりました。

ターニャ: The BBB サイトのトップページには最近 3 か月の新刊が掲載されています。あの時は、たしか、15 冊くらい並んでいたと思います。前後の月も刊行点数が多かったのです。

流水: そう。The BBB の作品数は丸 4 年かけて 100 冊を超えたところですから、ひと月に 11 冊というのは、本当に異常なことで。通常月の 5 倍から 10 倍もの作業量で、この時は、ぼくと工刀さんは、本当に悲鳴をあげて。現在の The BBB としては、量の面では、行くところまで行った、とさえ思いました。ですよ、工刀さん？

工刀: いや、あの時は……。

流水: もちろん、おぼえていますよね？

工刀: あの時は、私、冗談抜きで“夜逃げ”を考えていました。

流水: 2015年末から2016年春ごろまでは、本当に、いろいろ重なって。以前で言えば、積木さんの『都市伝説刑事 事件3: くねくね (踊る白い影)』の 때가、シャレにならないくらい大変でした。あの時も、工刀さんが nervous breakdown になりそうな感じだったじゃないですか。あの「くねくね」と比べて、2016年の修羅場と、どちらが大変でした？

工刀: うーん、やっぱり、2016年の最初の10か月……

流水: 最初の10か月って、ほぼ1年じゃないですか！（笑）

工刀: 特に前半ですね。『スカイ・クロラ』の最初の巻が出る6月くらいまで、あまりにもいろいろ重なって、発狂しそうでした。あの時に、頭を剃ろうと思ったのかな。

流水: それって、The BBB がスキンヘッドの原因じゃないですか！夜逃げする代わりに頭を剃った、という……。

秋月: 因果関係がありましたね（笑）。

ターニャ: そこで悟りを開かれたんじゃないですか。出家のごとく。

秋月: 魂の浄化、ですね。

流水: 秋月さんが、ちょくちょくスピリチュアル方向に持って行こうとしていますが（笑）。

工刀: そっか。秋月さん、そんなにもスピリチュアル方面なんですね。

流水: そう。だから『The Gifted』は、よく読むと、かなりスピリチュアル要素があって。一見すると良質のミステリー小説のようで、実は、秋月さんのスピリチュアル趣味が盛り込まれている、という。彼は、ミステリーの部分を書く時より、スピリチュアル部分を書く時のほうが生き活きしているんじゃないか、と疑うほどで。あと、食事の場面も好評ですね。

秋月: それは、やばいな（笑）。でも、『The Gifted』は、いわゆるスピリチュアルと言われていることが実際にあるとしたら、世界の実相はこんな感じ？というようなことも考えつつ書いてます。

工刀: なるほど。頭の中で、いろんなことが、つながってきました。

流水: ふり返ると、2016年の年始、The BBB サイトに最初にアップされたのは、『Towerld Level 0009』でした。これも当初は2015年末に出すはずが、遅れて、2016年1月中旬の刊行となって。この頃から、ぼくと工刀さんの作業の遅れが目立っていましたね。ただ、工刀さんは、『Towerld』については、何もしていないはずなんですけどね。著者ではなく、エージェントですから。

工刀: あ、あー、いや、まあ、その……エージェントの私は、たしかに、何もしようがないですよ。

流水: あれは、神狩り博士の原稿が遅れて、という理解で、よろしいんでしょうか？

工刀: 神狩り博士は自然現象で宇宙の真理そのものなんで、遅れるなんて、ありえないです。

秋月: 工刀さんが、メール見てなかったんじゃないですか？

工刀: そうそうそう、それ!

流水: それだ。工刀さん、忙しくて、メールを見るのを忘れたんだ。

工刀: うん。ちょっと、混乱してて。

流水: それは、神狩り博士には怒られないんですか? 「なぜ本が出ないんだ?」というメールが来たりとか。

工刀: 神狩り博士は自然現象であり宇宙の真理であってですね。はっきり言って、この宇宙がどうなろうと、知ったこっちゃないんです。だから私が生きようと死のうと、~~メ~~切に遅れようと、関係ないんですよ。

流水: じゃあ、刊行が遅れても怒られることはないんですね? 自然現象だけに。

工刀: 怒った瞬間、この宇宙がどうなっているのかわからん、という存在なんで。神狩り博士にとって私の存在というのは、蟻塚の中の蟻のようなもので。人間である私が蟻塚に干渉すると壊してしまうように、神狩り博士が干渉すると宇宙が壊れてしまうので。

流水: むしろ神? という感じもしますね。「神狩り」のはずが、実は「神」だった……?

工刀: 神だから、神を狩れるんでしょう。きっと、そういうこと……にしておきましょう。

秋月: 神狩り博士は遅れを気にするような存在ではない、ということですね。

1. 桜井亜美さんと日本における援助交際について



流水:『Towerld Level 0009』を別にしますと、2016年最初の新刊は、桜井亜美さんの『Girl recruits her God』という作品でした。これは実は、2年くらい前からThe BBBの隠し球企画として、あたためていました。「Cast Party 2015」のラストで、「The BBB 史上初の映像と連動企画があります」と予告していたのが、この作品です。桜井亜美さんは、ぼくや森博嗣さんと同期の1996年デビューで、2016年が20周年の節目だったんです。桜井さんのデビュー作『イノセント ワールド』は多くの言語に翻訳され映画にもなった話題作で、大ベストセラーとなりました。それに次ぐ第2作『ガール』が英訳され、桜井さんみずから映画の監督を務められた作品が、この『Girl recruits her God』なんです。まず、2016年1月に上巻(Chapters 1-7)を出し、下巻(Chapters 8-11)は4月に出しました。で、下巻を出す時に、桜井さんのインタビュー『God for Japanese Cool Girls』を無料コンテンツとして刊行させていただきました。このインタビューは、元々はYouTube用に撮影したもので、YouTubeにも動画がアップされています。桜井さんのお考えを伺ったり、質問したりしていて。その中で、映画は2016年6月公開予定という話も出ていました。当初は、それに向けてスケジューリングしていたんです。実際、とっくに映画は完成しているんですが、海外の映画祭に応募されているみたいで、その結果が出るまでは世に出せないようなのです。なので、映画が2017年に延期になってしまって。今年のBBBの活動の中では、残念だったことのひとつです。

ターニャ: 映画の予告編もYouTubeにアップされていますよね。

秋月: 観ました。映画版はどういう仕上がりなのか、気になっています。

工刀: 予告編を観ているだけに、早く本編を観たい！

流水: 本日発表の特報として、2017年1月に、『Girl recruits her God』の合本を出す予定です。実は、この合本をご購入いただいた方には、同作品の映画版をご視聴いただける、という前代未聞の読者特典があります。

秋月: 公開前の映画を観られる、ということですか？

流水: そうです。ウェブ上の非公開のページで、パスワードを入力することで映画を観られます。そのページのリンク先とパスワードが、1月発売の『Girl recruits her God』合本の中に記されています。

工刀: つまり、eBook を買うことで、公開前の映画も観られる、ということですね。

ターニャ: 小説を買うと映画がついてくる。なんて豪華！

流水: 読者の皆様、どうかお見逃しなく！ところで、この『Girl recruits her God』については、最初に刊行した時に、工刀さんから、「The BBB のラインナップの幅が、だいぶ広がりましたね」と言っていたのが印象的でした。工刀さんの印象を、改めて、ここで伺えますか？

工刀: そうですね。桜井さんの作品が出る前は、女子高生が主役の作品というのは、The BBB には、なかったじゃないですか。単純な話ですけれど。麻薬が出てきたり、援助交際が出てきたり。日本人が世界に向けて日本を紹介する時に、あまり触れたくない社会の闇みみたいな部分をさらけ出した作品だな、という印象を受けました。あれを、たとえば、日本のことを何も知らない外国人が読んだら、「日本って、こんな国だったんだ……ショック……」と思う可能性もあるかなと。そういう意味も含めて、The BBB のラインナップの幅が広がったと感じました。

流水: たしかに、そのように本当にリアルな社会を包み隠さず紹介する、というコンテンツは、これまでの The BBB にはなかったですね。たとえば、The BBB には現代に生きる忍者を主人公にしている作品などもありますが、それも、現代のリアルな日本社会を描いているわけではないですからね。

工刀: そもそも、忍者って、実在したかどうか、わからないんですよ。

流水: くの一 (女忍者) は、実在しませんからね。くの一は、山田風太郎 (やまだ・ふうたろう) 先生という伝説的な作家さんが生み出されたものですから、完全にフィクションです。

ターニャ: そういう女性たちが吉原 (の遊郭) にいた、という話は伝わっていますけど。

流水: それも、本当か、わからないけれど。司馬遼太郎 (しば・りょうたろう) 先生がフィクションとして創出されたエピソードが、歴史上の事実と錯覚されているケースも多いし。歴史小説は、作家の創作が事実になってしまうことは多くありますね。

工刀: 坂本龍馬なども、伝えられている人生には、けっこうフィクションの要素があるみたいですね。忍者の世界は、何もかも秘密にしていたらしいです。証拠をことごとく隠滅していたので、後世に伝わったものはないはずで。そもそも、いたかどうか、わからないんです。

流水: たぶん、忍者的な存在は間違いなくいたでしょうが、映画などで描かれるように、洗練されたスタイルで戦うああいふ忍者は、いたかどうかは疑問ですね。だって、逆に目立ちますよね (笑)。いわゆる忍装束 (しのびしょうぞく) って。

工刀: 現実には、農民に紛れていた、とか、そういう感じかもしれないですね。話を戻すと、『Girl recruits her God』でジャンルの幅が広がったわけですね。ジャンルが限られると読者を限定しますが、かといって、あまり幅を広げすぎても、今度は器用貧乏になってしまいそうです。

流水: The BBB には、日本人のプロ作家さんから「私の作品の英語版も出してもらえませんか？」という問い合わせが、けっこう定期的に寄せられています。いろんなジャンルの著者の方たちで。

工刀: どんなジャンルですか？

流水: 寄せられる小説のジャンルは、本当にバラバラです。どのジャンルでも「作品を英語にしたい」という希望は同じ、ということでしょうね。小説だけでなく、社会問題についての本とか、先日も、スピリチュアル系の本の売り込みがありまして。……と言うと、秋月さんが食いついてきそうですが。

秋月: 興味はありますね (笑)。

流水: 今後、そうした新たな著者の方たちと一緒にやらせていただく可能性もありますが、現在の The BBB は規模が小さいので、あまり手広くすると收拾がつかなくなるので、積極的に広げる方向性は、あまりないですね。幅を広げる良い面もあるでしょうが、われわれの作品は今や 100 を超えて、ラインナップとしては、既に、かなり充実しているんですよ。これから『Towerld』や『The Gifted』に入ってくださる読者も、たくさんいるわけで。

工刀: たしかに、『Towerld』や『The Gifted』に似たような作品を増やす必要はないかもしれませんね。

秋月: なるほど、そのように The BBB 全体のバランスを見る発想はなかったです。

流水: 秋月さんやターニャは、『Girl recruits her God』についての印象は？

秋月: 桜井さんインタビューを拝読した時には、小説の最後のほうに驚きの展開がある、という下りが、やはり、とても気になりましたね。

流水: ああ、ストーリー終盤のサプライズについて、ですね。たしかに、主人公のトラウマを巡って、ミステリー的な仕掛けがあるので、サプライズを楽しめる面もあります。そういう意味では、ミステリー作品とも言えます。

ターニャ: 日本の抱えた社会問題を海外に伝える上での、ひとつのきっかけにもなると思います。外国人の方に、まず「援助交際」というものを伝えないとイケないですよ。日本では、個人での援助交際というのは法律違反ではないんです。集団で組織的に行うことは犯罪になりますが、ハタチ以上の女性が援助交際することは法には問われません。問題は、未成年の少女がそれをする、ということと、日本には、そのくらい貧しい人たちがいる、ということで。そういうことは、きちんと伝える必要があるかと。

流水: 援助交際というのは、日本にしかないと言われていて、世界から注目されています。Wikipedia 英語版でも、enjoy kousai という項目があるほどで。売春自体は、どの国でもあるわけですから。

ターニャ: 海外では、生活のために売春するわけですが、日本では、貧しい子だけでなく、お金を持っている子たちが援助交際するのが特徴一。

流水: それが、たぶん日本だけの問題だよ。経済的に困窮しているわけではないのに、むしろ、お金を持っている子たちが援助交際してしまう、という。

工刀: ブランド物を買うため、とかね。

ターニャ: そうです。

流水: それは、この桜井さんの作品の中に、まさに描かれています。『Girl recruits her God』は、援助交際が社会問題化していた1997年を舞台にした物語ですが、2016年現在でも、援助交際はあるよね？

ターニャ: 20年前は、お金持ちの女の子たちが援助交際していたけれど、今はデフレ社会が続いて生活に困って、高校の学費が払えない、生活費すら困窮しているから援助交際する、という子が多くなりました。

流水: 動機は変わっていますよね。バブル経済の名残のあった1990年代には、贅沢するための援助交際であったのが。

ターニャ: それだけじゃなくて、昔は自分が欲している愛情が得られなかったから、それを年上の父親的な男性に求めている、という女子高生が援助交際をしていました。あとは、仲間内で虚勢を張るための変な背伸びの仕方。

流水: 最近では、大学に行く学費がないから風俗で働く女性も珍しくない、という話は聞きますね。

ターニャ: 会社員の人でも、夜はそういう仕事をして生活費を稼いでいる。風俗とまでいなくても、ランジェリー・パブ、クラブ、キャバクラ、ガールズバーなど仕事の形態は多種多様です。

流水: 東日本大震災の後にも、困窮して、そっちの仕事をするようになった、という話も耳にしました。なので、『Girl recruits her God』で描かれている援助交際は、あくまで20年前の日本、ということはある必要がありますね。

秋月: 女子高生ってことで言うと、『The Gifted』も、女子高生と男子高生の話ではあるんですよ。

流水: あー、そうか。言われてみれば、たしかに、そうですね。大人のメインキャラもふたりいるので、「女子高生の小説」という印象ではないですけど。

秋月: そうですね。あと、『The Gifted』の場合は、日本の女子高生のような「制服による記号化」は、されていませんね。

流水: 『The Gifted』の女子高生たちは、牧歌的ですね。どう考えても、援助交際はしてなさそうです。

秋月: そもそも舞台が「シティ」と呼ばれる架空の都市ですからね。

ターニャ: わたしから秋月さんに質問したいことがあります。秋月さんにとっての高校生のイメージは、今、描かれている『The Gifted』のイメージのほうが強いですか。それとも、もう少しダークな桜井さんのようなイメージもお持ちですか。

秋月: それについては、両方のイメージを持っています。ダークなほうは、自分では書かない気はします。

流水: ちなみに、秋月さんの学生時代は、どうでしたか。まわりにいた女子高生は？

秋月: いわゆる不良はいましたが、進学校だったので、ふつうの女の子たちでした。裏で何があったかはわかりませんが、地方都市だったので、たぶん、東京のように激しい感じではなかったと思います。ふつうだった気がします。

流水: 工刀さんの場合は、高校時代は海外でしたよね？周囲の高校生は、どんな感じでした？援助交際はないですよ？

工刀: 高校の時は、アメリカのいわゆる田舎町だったので。田舎臭く、牧歌的で。裕福な人たちが通うような小さなハイスクールでしたが、私服のファッションはダサくて。自分が実体験した高校生は、そんな感じでした。高校三年の時にデトロイトに引っ越したんですが、田舎町と比べると、たしかに、ちょっとやばい雰囲気があった気がします。

流水: じゃあ、そのやばい中で生活してきた工刀さんから見て、日本のダークサイドを描いている『Girl recruits her God』は、どういう印象ですか？工刀さんの場合は、海外から見た視点だと思うんですよ。

工刀: たしかに、私の場合、海外からの視点ですね。外国人が日本の社会に対して抱いているイメージとは、かなり異なる闇を感じます。日本って、犯罪の少ない国だと思ってたけど、こんなやばいことも起きてるのか、と。

流水: なるほど。そういう印象を伺えたのは貴重です。ターニャは国籍不明として、秋月さんやぼくは日本で育ってきましたから、こういうダークな世界もあるんだな、というのを、ワイドショーやニュースでも知っていますから。たしかに、外国から見ると、日本って、犯罪がぜんぜんないかのような印象もあると思いますし。

工刀: 今、外国で日本に対して誤解を抱いていることがあると思うのは、国連という組織が今、機能しているのかわかりませんが、国連の高官が日本は女性蔑視の国だというイメージを抱いていて。日本の女性の30%は援助交際を経験したことがある、とか言っているらしいのです。「13%の聞き間違い」であるとも聞きますので、どの数字が正しいかはアテになりませんが。どちらも、常識的には有り得ない数字であると思います。

流水: それは、デタラメなデータですね。それは違います、ということは、ここで言いたいですね。

工刀: そういう間違っただけを吹き込んだのも怪しい連中なんですけど、変な誤解を抱かれているとは感じます。そのような誤解を抱いている状態で『Girl recruits her God』を読むと……。

流水: 誤解が強まる？

工刀: ——と思います。世界一のセクハラ国家ニッポン、みたいな。ちなみに、セクハラについては、普段から色々と感じたり考えている事があるのですが、ここで伝えておきたい事があります。日本も悪い状態であると感じるのですが、日本より他国のほうがきつくて多いと思います。まあ、私がアメリカに住んでいて受けた印象ですけれども。話は逸れますが、アメリカのほうが日本よりも、男女差別は激しいと私は感じます。こう言うと、意外な顔をされることも多いのですが。

ターニャ: わたしからも意見を言っていていいですか。まず、このメンバーの中で、いちばん援助交際を身近に知っているのは、わたしかもしれません。というのも、わたしは高校時代は日本で過ごしていて、生徒会に入っていたんですが、リアルに、生徒会の中の女の子が援助交際

をしていました。なので、どういう手順を踏んで、そういう男性と出会うとか、どういうことがきっかけで女子高生たちがそのグループに入ってしまったのか、とか、よく知っています。あと、当時は90年代前半だったので、バブル崩壊後の氷河期という経済低迷時代で、社会の流れとして、曇り空みたいな雰囲気です。日本人ひとりひとりが希望を失くして不安を抱え、暗い顔をしていた印象があります。だから援助交際が広まっていたとも思うし、実際に、どこの学校のどの学年の誰それが渋谷のリーダーだとか、新宿の歌舞伎町だったら、あそこの女子高生が何人か紹介してくれる、とか。そういう情報もリアルに知っていて、ネットワークがありました。ただ、20年前と比べると、2016年現在の援助交際の形とは違うと思います。日本の社会情勢もだいぶ当時とは異なります、ということは読み手にアナウンスしても良いかもしれません。それと、先ほど工刀さんがおっしゃったように、海外と日本の比較をすると、日本というのは、悪いものをすべて隠そうとする国民性、社会性があるって、そのせいか法律も顕在化しないし、ハラスメントも差別も見えないところで存在し続けていて、見えやすい欧米社会と比べると、日本は一見、穏やかな社会だと思われるかもしれません。個人的には、欧米も日本も同じようにハラスメントも差別もあり、それが法律できちんと透明性を持って守られているかないか、に違いがあるのだと思います。

流水: 秋月さんは、どう思われますか？

秋月: 単一民族国家と、そうじゃない国の違い、というのはないんですかね？

流水: それも、もちろん、あると思います。

2. 早川洋平さん、インドで大ブレイクの謎



流水: 話が社会問題にまで膨らんで、「朝まで生テレビ」みたいになってきました（笑）。

ターニャ: でも、意義のある議論はできたかと思います。

流水: 桜井さんについては、だいぶ語れましたね。最初の作品から話が長くなったので、次は短めに。『戦争の記憶』シリーズは、2016年は1冊しか出せませんでした。著者の早川洋平さんには、定期的に刊行させていただきたいです、とお話ししているのですが、単純に、ぼくの時間がなかっただけです。この『戦争の記憶』は、早川さんの会社、キクタスさんのホームページでも読めるのですが、電子書籍版をThe BBBで出させていただいています。このシリーズは日本国内でも海外でもけっこうダウンロードしていただいています、反響も実感しています。ただ、今日、ぼくがどうしてもお話ししたいのは、皆さんのご意見も伺いたい、とっておきのトピックがありまして。2016年の新刊ではなく、以前刊行した早川洋平さんのインタビューについてなんです。「The BBB インタビュー・セレクション」シリーズの第1弾で、早川さんのご希望により、英語版しか刊行していないのですが、で、何を語りたかったかというと、この早川さんインタビューが、なぜかインドで大ブレイクしているんです。

秋月: ああ、先日、おっしゃってましたね。

流水: 今まで、The BBBの英語無料作品のダウンロード数としては、1位が『King In the Mirror Vol.1』で、2位が『The Gifted Vol.1』だったんです。ところが、早川さんインタビューが最近グングン伸びていて、英語無料作品の2位に急浮上しました。少し前には5位だったのですが。そして、そのダウンロードの95%以上が、なぜかインドでのものなのです。なぜ、早川さんインタビューが、インドでこんなにもウケているのかな、と。ぼくの仮説としては、早川さんのビジュアルがインドでウケているのかな、と。早川さんは日本でもかなりイケメンと言われていますが、インドでは特にそうなのかなと。これについて、皆さん、意見はありますか？

工刀: そうですね。まず、インドでウケるイケメンというのは、イメージとして、どういう？ハリウッドのスーパースターみたいな感じなんですかね。

流水: われわれのイメージするいわゆるインドのイケメンって、早川さんとはイメージが違いますよね。

秋月：目鼻立ちのくっきりした感じが、いいんですかね。

流水：明らかに、日本人とは違うイケメンが求められるとは思うんですが。

工刀：日本人とは違って、それでいて、いわゆるインド系とも違う、なんだろう……そういうことかな。よくわかんない。ほんと、理由はビジュアルなんですか？

流水：インタビューの内容も良いとは思うんですが、内容だけで、1国にそれだけ人気ที่偏るかな、とは不思議に思うんです。1国に偏る、というのは、ちょっと異常な現象で。どうしてこれをトピックにするかと言うと、われわれの目ざすブレイクスルーのヒントになるかもしれないじゃないですか。

工刀：なるほど、たしかに。理由がわかれば、そうなりますね。

流水：局地的ですが、何らかのブレイクを果たしているのは事実なので。

秋月：たとえば、まったく違う題材で早川さんの写真を載せたものを出してみるとか……？

流水：『The Gifted』や『Towerld』の表紙が急に早川さんになっていたりして（笑）。それで、試しにインドの反応を見るとか？

ターニャ：あ、その件なのですけれど。今、話を聴きながらちょっとネットを検索してみたら、もしかしたら……。インドに本社があるIT企業の管理部門担当役員に、ハヤカワ・ヨウヘイさんという方が、いらっしゃるみたいです。

流水：え、そうなの？

ターニャ：その関連で見られている可能性があるかも。この方、インドで大活躍されてるようなので。

流水：なるほど、そういうビジネスパーソンが同姓同名でいるんだ。

ターニャ：これが原因じゃない？

流水：そっちのほうが説得力ありそうだな。

工刀：たぶん、それですよ。ビジュアルうんぬんよりも。

秋月：謎が解けましたね。

ターニャ：ちなみに、お名前の漢字は違うようです。

流水：でも、アルファベットでしか表記していないから、間違えられる可能性はあるね。ミステリーの解決みたいだ。

秋月：なんかスッキリしましたね。

3. あなたは犬派ですか？それとも、猫派？



流水: では次は、『モモの世界遺産旅行記』シリーズです。モモについては、ご報告があります。今年、モモの世界編の3巻と4巻を出したんですが、これで一応、世界編は完結なんですよ。

秋月: 日本に帰って来ましたよね。

流水: はい。で、今、The BBBのFacebookでは、日本編ふたたび、ということで連載を継続しています。これは去年のキャスパでも話したんですが、やっぱり、日本を舞台にした時のほうが反応は良かったですし、日本人が世界を紹介する、というのは変かな、ということもあり。最近、Facebookの連載では、舞台を日本に戻したら、やはり、世界編の終盤より反応は良くなっていると感じられます。アクセス数とかを見ると。なので、世界編はマンネリ化も感じていたんですが、日本編として、行けるところまでは行ってみたいと思います。ターニャからは何か？

ターニャ: The BBBの戦略として、日本の世界遺産を紹介する、というねらいは良いと思います。個人的にも、同じ考えです。2016年12月現在、日本の世界遺産は20件ありますが、それは大まかなタイトルが20というだけで、たとえば京都だったら、構成資産が23か所あるので、ひとつの物件からエピソードを広げることができます。

秋月: そうですよ。

ターニャ: たとえば奈良の法隆寺にしても、「法隆寺とその地域」ということで、実際には、法隆寺と法起寺のふたつを言ってるんです。ということなので、タイトルは20だけど、日本の世界遺産の構成資産をぜんぶ紹介できるといいな、と思います。それが、日本編を再開する意味です。今度の日本編では、データを組み込めそうなら、紹介場所のGoogle Mapなど地図を入れたいです。

流水: あー、それは良いアイデアだね。

ターニャ: そうすると、外国人観光客の方たちが、KindleとかPDFとか何でもいいんですけど地図データを見ながら、モモと同じ場所を訪れることができるかなと。

流水: これはモモが見た風景だ、とね。

ターニャ：日本の世界遺産に興味を持っている方たちに、そこを巡ってもらえれば嬉しい。

流水：最近、AR（Augmented Reality＝拡張現実）という言葉があつて、2016年、世界中で社会現象を巻き起こした「ポケモンGO」もその一例なんですけど。「ポケモンGO」が流行った時、ぼくは、『モモの世界遺産旅行記』と通じる要素を感じました。「ポケモンGO」では、カメラで写した現実世界の風景の中にポケモンが出てくるわけですが、モモのシリーズも、現実の風景の中にモモを出現させている点で共通しています。なので、現地を訪れた方が『モモの世界遺産旅行記』を見ると、「ポケモンGO」的な楽しみ方もしてもらえenと思います。

ターニャ：AR的なシステムがもし作れるんだったら、その場所に行った時にモモのアイコンが出るとかね。そういうアプリがあつたら面白い。ただ、アプリをつくれる人材が、今のThe BBBにはいなくて（苦笑）。なので、地図データを入れるのが、今は、せいっぱいです。

秋月：モモについて、気になっているのは、モモは、その場に合わせて、毎回いろんなポーズを取っているんですか？

ターニャ：たまにわたしがヒマな時にモモの写真を撮るんですが、それをコラージュしているだけで、特にポーズを取ってるわけではないんです。

秋月：いろんなポーズで出てくるので、そこが凄いな、と思ってるんですけども。

ターニャ：でも、使い回しもありますよ。

秋月：あと、合成がうまいな、と。

ターニャ：そうですか？ありがとうございます。

流水：秋月さんが前、絶賛してくださったのは、モモが壁画になっていたやつで。

秋月：壁画になってる！と、驚きました（笑）。



ターニャ：ナミビアのトゥウェイフルフォンテンですね。

秋月：何でもつくれるんだなー、と。

流水：工刀さんは、モモについて何かありますか？工刀さんは、キャット・パーソンですけど。

工刀：The BBBはどうしても、犬派がメジャーというか……。

ターニャ：わたしは、もち犬派ですけど。

工刀：もしかして、この中で猫派は、私だけかなと。

流水：ぼくも昔は猫派でしたよ。ただ、途中から犬も好きになりました。

ターニャ：ちなみに工刀さん、わたし、猫も好きなんですよ。

秋月：自分も、猫のビジュアルは好きですよ。

流水：The BBBのチーフ・エンジニアのK.G.さんは犬派です。竹内麻喜さんは、秋月さんと同じく、猫のビジュアルは好きだけど、犬派だとおっしゃっていました。あと、カイ・チェンバレンは、もろ猫派でした。森博嗣さんは、ずっと犬を飼ってらっしゃいますが、ターニャ同様、猫もお好きだったはずですよ。

ターニャ：わたしは遺伝的に猫アレルギーで喘息（ぜんそく）が起きてしまうので飼っていないだけ。でも、子供の頃には家に猫がいましたし。人生の中で10年くらいは猫と生活していました。喘息の薬と一緒に。

工刀：そうだったんだ。じゃあ、犬派、猫派じゃなくて。

ターニャ：飼うのなら犬しか無理、ということなんです。

流水：ターニャは動物全般が好きなんです。

ターニャ：そうそう、何でも好き。馬とか牛とかも。

流水：犬と猫の両方好きという人も多いですよ。The BBBのFacebookに「いいね」してくださる方たちには、アイコンが犬や猫という方が、非常にたくさんいらっしゃいます。

工刀：たいていそうなんじゃないですかね。私も犬が嫌いなわけではありませんので。ただ、猫のほうがもうちょっと好きかな、という。

ターニャ：秋月さんは？

秋月：ビジュアル的に猫は好きなんです。この前もペットショップで見たら可愛くて。犬は犬で可愛いですが、犬のほうがカッコイイですね。

流水：たしかに、猫がカッコイイというのは、あまりないですよ。

秋月：猫は、可愛い感じがありますね。

工刀：カッコイイ猫は、虎とかライオンになっちゃうから。

ターニャ：わたし、虎も飼ってみたい。

流水: え、マジで?あと、ぼくはたまに「モモは架空の存在なんですよ」と聞かれるんですが、実在の犬ですからね。CG と思っている人がいるんですが。神狩り博士の話じゃないですけど、モモは本当にいるので。神狩り博士は、工刀さんによると、自然現象なのかもしれないですけど。

工刀: 私も、モモには一度は会ってみたいですよ。たしかに、可愛いですよ。

秋月: 瞳が、つぶらなんですよ。

ターニャ: 食べ物を前にすると、瞳がつぶらになるの(笑)。

流水: 工刀さんはネイティヴとして、モモの世界編と日本編では、印象はどう違いますか?

工刀: The BBB に来る目的次第だと思います。日本のことをもっと知りたいなら、日本編のほうが良いでしょう。世界編だと、海外旅行して外国で回転寿司屋に入るような感じになっちゃうのかなと。

流水: われわれが世界を紹介するのは変ですよ。世界編は、やって良かったですが。

工刀: たしかに、世界編をやった意味はあると思います。

秋月: 興味ある人にとっては、あれだけたくさんの国の世界遺産が写真つきで紹介されているのは、とても良いと思いますね。

工刀: それを導入編にして、こちらが日本編です、と。

秋月: 次はディープに紹介します、ということで。

工刀: 極端な話、うちの近所のラーメン屋でもいいんじゃないですかね。

流水: いやいや(笑)、一応、あれは世界遺産を紹介しているので……。

工刀: あ、そうでした!ごめんなさい。

流水: それだと、秋月さんの『The Sifted』シリーズになっちゃいますし。あ、『The Sifted』とモモのコラボがあっても面白いかもしれないですね。世界遺産の近くのラーメン屋とか。で、モモが出てきて。

ターニャ: それ、いいアイデア!

流水: 秋月さんの料理の写真にモモが写っている、とか。

ターニャ: わあー、ステキ!

秋月: 考えておきます(笑)。良いお店があれば、ですね。

工刀: いいと思います。『Towerld』にはモモは出せないかもしれないけど。

ターニャ: んー、どこかの世界遺産になっているパラドール(城のホテル)でモモが寝ていて、夢に『Towerld』が出てくるとか。

工刀: え、夢オチですか?

4. 久保マサヒデさんの『脱・英語力神話』



流水: 次は、久保マサヒデさんの『脱・英語力神話』と久保さんインタビューについて、お話ししたいと思います。今のところ日本語版しか出していない作品で、これはThe BBBでは唯一の例外的なケースなのですが、この座談会を英語で聴いたり読んだりされる読者の方にも、われわれの重要な活動のひとつとして、久保さんの作品をご紹介しますと思います。久保マサヒデさんは、イギリスを拠点に国際的なビジネスの現場でずっと活躍されてきた方なのですが、数年前に日本に戻ってこられた時に、ALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病を発症されました。ALSについては、アイス・バケツ・チャレンジで有名になりましたので、御存知の方も多いでしょう。今現在も、まさに闘病生活を続けておられる久保さんが、ご自身の海外での豊富なビジネス経験を後進のために形にしたいと思って書かれたのが、『脱・英語力神話』です。この作品は上巻が無料、下巻が有料で、久保さんのインタビューも無料で同時刊行しました。また、初めての試みとして、著者インタビューも刊行と同時にYouTubeにアップして、The BBBサイトの該当ページでも観られるように埋め込みました。たくさんの皆様に応援していただいて、無料の上巻はAmazonで総合5位になりました。これはThe BBBとしても最高記録で、その実績もあり、The BBBのオリジナル・コンテンツとしては初めて、紙の本としても刊行されました。そのように、いろいろとThe BBB史上初のことが重なった企画で、大きな反響も得られ、闘病生活が今も大変な久保さんにも喜んでいただけたのは、本当に嬉しかったです。

ターニャ: 難病と向き合いながらも、作品をつくることが著者の現実の人生の中でもエネルギーに変わるさまを、目撃できました。わたしたちにとって、とても貴重な体験でした。久保さんのメッセージだけでなく、生き方も描けたと思っていますし、わたしたちThe BBBにとって、宝物のような作品です。電子書籍の出版を通して、久保さんご本人やご家族と、また、同じ病気の方たちをも応援できたような感じがしました。わたしたちが本をつくるのが誰かのサポートになるというのは初めての経験でしたので、今後もこのような機会があれば挑戦したいですし、久保さんの今後の作品も、また、わたしたちに何かできることがあるなら、できる限り、サポートしていきたいです。

流水: ちなみに、この『脱・英語力神話』の表紙は、久保さんの強いご希望で決まったもので。デザインはターニャなのですが、表紙の絵は、久保さんがウェブで見つけてこられて、どうしてもこの絵を使いたい、と希望されたものなんです。著者の方が非常に思い入れのある表紙をそのまま本にできた、というのも、The BBBだからできたと思います。この作品は、のちに新

書として刊行されたわけですが、新書だとデザインの統一フォーマットがありますので、表紙には絵も写真も使えず、文字だけですからね。The BBB は著者の方たちがやりたいことができる場なのだ、ということのを改めて確認できました。

ターニャ: フォントのデザインも気に入ってくださって、嬉しかったです。

秋月: 自分も一時期、海外で仕事した経験がありますので、久保さんが書かれているビジネス上のテクニックには共感できることが多かったです。英語がそこまでできなくても、気持ちがわかれば会話ができる、というところとか。相手の価値観に配慮しつつ自分の得意なところを出していければ、何とかやっていけるものだな、というのは自分でも思っていたので。

流水: 久保さんがご病気と闘いながら執筆された、という点については、書き手の秋月さんとしては、どのような印象を受けられましたか。

秋月: ALS については、たしか、子供の頃に漫画の『ブラック・ジャック』で読んだことがあって、すごくインパクトが強くて。不治の病として、重いイメージがあります。ジワジワと筋力が衰えていく、というところが大変ですが、だからこそマイナスにならずに生きていくのが大事なのかな、とは思いますが、あまり軽々しいことは言えないな、と。難しいですね、自分の中では。何か言えるほどのものを自分が持っていないので。

工刀: 私も、たしかに海外での生活は長かったのですが、大学院生までの経験でした。いわゆる社会人になってからは日本に住んでいますので、社会人一仕事をしている人間としては、海外での経験はゼロなんです。ですから、久保さんが書かれている海外でのビジネスの苦労話は知らないことばかりで、この作品からいろいろ学べました。私は自分のビジネススキルにまったく自信がありませんので、仮に英語力があっても、ビジネスの現場では通用しないなと思いました。いくら英語が流暢でも、仕事が終わってなければ会話にならない、というのは久保さんが書かれている通りだと思います。結論からすれば、海外で仕事をする上で、もちろん語学力が高いに越したことはないのですが、その前に、まずは日本で仕事ができること。その礎ができてから海外に出たほうが良いと思います。たとえ英語ができて仕事ができない人は、英語は苦手だが仕事は得意な人より苦労するのではないのでしょうか。そうした疑似体験ができて、読めて良かったです。この作品の英語版の刊行は、計画されているんですか？

流水: 今のところ、そうしたご希望は伺っていないですね。久保さんご自身は、あくまで日本人ビジネスパーソンへのエールとして書かれた面が大きいですので。このキャスパでご紹介して、海外の読者から「英語版を読みたい」という反響があれば、久保さんにご相談する、ということになると思います。

工刀: 英語圏の人向けに需要があるか、ということですね。

流水: そうですね。あくまで日本人向けに書かれたものですので。

工刀: 視点を逆転させるなら、IBM 本社から日本にやってきたアメリカ人が、「日本でビジネスをするには、どうすれば良いか」という本を書いて、それをわれわれが読むような感覚ですかね。まあ、そうしたケースですと、興味は抱きますね。いずれにしても、久保さんのご希望と、英語圏の読者の反応次第ですかね。

流水: 久保さんの企画が The BBB に持ち込まれたのは、実は、去年のキャスパを収録した後で、そのため、去年のキャスパでは、この話は、まったく出ていませんでした。2015年の年末から

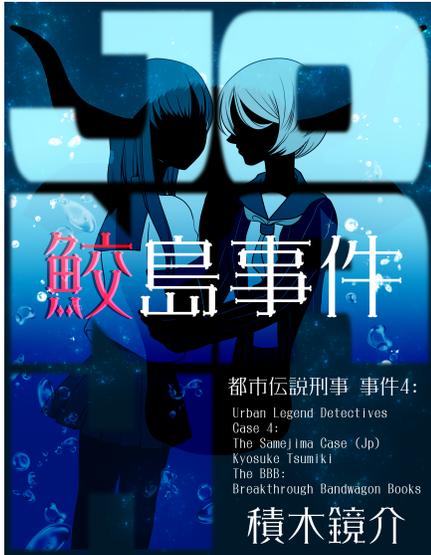
2016年の年始にかけて、The BBBの刊行ラッシュ準備で、工刀さんもぼくもかなり忙殺されていたのですが、その時に久保さんの存在を知って、「久保さんががんばってらっしゃるんですから、われわれも、もっとがんばらないといけませんね」というお話をしましたね。

工刀: ああ、ありましたね。それがあったから、もしかしたら夜逃げしなかったのかもしれない。久保さん様様ですよ。

流水: 桜井さんの企画は映画が2017年ということで2016年は保留になってしまった感はあったのですが、久保さんの企画は今年のThe BBBを象徴する活動のひとつだったと言えます。

工刀: 今年はいろいろありましたが、たしかに、久保さんがひとつの大きな柱であったのは間違いありませんね。

5. 『都市伝説刑事』の番外編「鮫島事件」



流水: 続いて、『都市伝説刑事 事件4: 鮫島事件』について語りしたいと思います。

秋月: プロローグにあたる冒頭の-0.5-の章で、いつもの「黒い友達」と「白い友達」のかけあいがなくて、驚きました。

流水: あれがなくて、びっくりしましたね。今回は、いきなり冒頭からトップスピードで。

秋月: そうなんですよ。「あれ、いつものかけあいがない!？」とって。

流水: いきなり事件が始まるので衝撃でしたね。疾走感があって良かったです。今回は『都市伝説刑事』シリーズの番外編なんです。潮崎彩乃（しおざき・あやの）という、いつもは脇役の女子高生をメインに据えて。

工刀: ここでも女子高生ですね。実は皆さん、けっこう女子高生を書いてるじゃないですか（笑）。

ターニャ: 作家さんによって、描き方がぜんぜん違うのも、面白いですよ。

流水: 今回の事件は、「事件3: くねくね」の裏で進行している事件なんです。「くねくね」の時に、小林刑事と潮崎彩乃が接点を持つんですが、その時に、潮崎彩乃は、こんな事件に巻き込まれていたことが、今回、明らかになります。

工刀: たしかに、「くねくね」と同じ場面が別の視点で描かれていましたね。

流水: 去年のキャスパで、工刀さんとぼくが「くねくね」の作業で死んだという話をしたら、積木さんに平謝りされてしまいまして、逆に申し訳なかったです。いやほんと、われわれとしては、積木さんに長い話を存分に書いていただきたいんですよ。分割していただければ問題ないですよ、工刀さん。

工刀: そうですね。長いこと自体は構わないのですが、量をこなすために私の校正の質が下がるのは怖いので、それを防ぐには分割したほうがいいと思います。

流水: 作家さんによって、それぞれ個性があると思うのですが、積木さんは思う存分に書いていただいたほうが力を発揮されるのかな、という気がしてしまして。今回、番外編ということもあるのですが、量に関しては、積木さんがだいぶ遠慮してくださったのかな、という感じで。そこは正直、申し訳なく思っています。

工刀: でも、短くするために場面などが省かれている、という印象は受けなかったです。

流水: なら良いのですが。積木さんは、このシリーズをスタートされる時から、「都市伝説刑事は、事件は、ぜんぶで6つです」と、おっしゃっていて。それは今でも変わっていないそうです。もう4番目の事件まで辿りつきましたので、事件は、あと2つです。それぞれ独立した事件なのですが、積木さんの中では、あくまで6つの事件で1つの世界だとお考えのようで。次回の「事件5」は長くなりそうなので、分割していただくことになるのではないかと予想しています。

工刀: 分割して、後半は少しズラして発売、というのが理想ですね。われわれの作業としては、ですが。

流水: 『Towerld』の場合は、SFですが——あ、あれは、SF と言っているんですね？

工刀: あれは、何なんでしょうね……。

流水: ジャンル分けは難しく、『Towerld』というジャンルですけどね。

工刀: そう捉えていただけると理想的かもしれませんが。あくまで、エージェントとしての意見ですが。

流水: それと違って、『都市伝説刑事』と『The Gifted』はミステリー——The BBB から刊行させていただいているオリジナルのミステリー作品として、比較すべき2つのシリーズだと言えらると思います。その書き手である秋月さんからして、『都市伝説刑事』と著者の積木さんに対して、どのような印象を持たれていますか？積木さんは毎年、メフィスト賞作家さんたちの集まりで会って、お話もされていますよね。

秋月: いちばん最初に積木さんと出会った時に、何のネタで行きましょうか、という話を、みんな意見交換しましたよね。「都市伝説は、誰がつくっているかわからないから、フリーだよ」と、蘇部（健一）さんか矢野（龍王）さんに言われて、都市伝説研究書の定番である『消えたヒッチハイカー』を、まず読んだんです。そこから自分も、都市伝説を能力化する、という感じで話をつくり始めました。結果的に、積木さんも都市伝説だったので、ちょっとかぶっちゃったかな——という気持ちはあって。

流水: その点、気になっていました。都市伝説を扱っている、という点では、実は、もろかぶりなんですよ。

秋月: 積木さんのほうがはるかに造詣が深いところに、自分が『The Gifted』を書いちゃって良かったのかな、と、ずっと気になって……。

流水: でも、お互い、住み分けてらっしゃいますよね。積木さんは本当に、これ以上ないくらいディープな都市伝説の世界で。秋月さんはカジュアルに都市伝説を採り入れている、という印象がありますので。

秋月: 自分の場合、実際にないような都市伝説まで創って書いちゃうので。まあ、それはそれでいいのかなと。

流水: それについては、積木さんはキレてるかもしれないですけどね。「こいつは都市伝説をナメてる」、と（笑）。さっきの秋月さんの話を少し補足すると、まだ工刀さんと出会う前ですが、メフィスト賞作家さんの集まりとは別に、The BBB の決起集会のようなものがあったんです。ぼくと秋月さんと積木さん、蘇部さん、矢野さんの5人で集まって、The BBB でどのようなことをやるべきか、皆さんと意見交換させていただく場があったんです。

秋月: あの時、何を書こうかなー、という話をして。で、都市伝説を書いてみようかと思って。その後、台湾のホテルで寝ていた時に、ビデオにだけ映る幽霊の夢を見て。そこから Vol.1 ができたんですよ。

流水: そういう意味では、あの集会から『The Gifted』と『都市伝説刑事』の両方が生まれたわけで、ライバルというより、実の兄弟のようでもありますね。秋月さんは都市伝説に関心を持たれて、その延長で『The Gifted』を執筆されているわけですよ。そうして都市伝説に愛着が湧いてきた中で読む積木さんのシリーズの印象は、どんな感じですか？

秋月: それ以前は、都市伝説をあまり意識したことがなかったので、都市伝説のところを読むだけでも、毎回、面白いです。今回の「鮫島事件」も、あまりネタバレはできませんが、こういう書き方自体で都市伝説化させることができるんだな、と。あるのかないのかわからない都市伝説、という点が面白かったです。「牛の首」の話は、ちょっと読んでみたいな、と思いました。オリジナルのほうを。

流水: 小松左京先生が書かれていましたね。昔、読んだことがあります。

秋月: あと、「メリーさんのメール」とかも、いろんな人が題材として使っているんですが、それぞれの料理の仕方があるんだな、と思います。積木さんは、「都市伝説を現実に起こすにはどうするか」という書き方じゃないですか。そこが非常に面白いなと。

ターニャ: 女子高生の話と同じで、都市伝説の描き方にも作家さんの個性が出るんですね。

工刀: 私は「事件2: ひとりかくれんぼ」から校正させていただいているんですが、思い出としては、ボリュームたっぷりて校正しごたえのある、とても食いごたえのあるシリーズだと思っています。校正する上では、もちろん、内容も読みますので、シリーズが今後どういう展開になるのか、という点も気になります。「鮫島事件」では、「白い友達」……あれ、「黒い友達」？どっちでしたっけ。いつも混乱するんですが。

流水: 作者の積木さんも混乱されていますからね（笑）。

工刀: 黒いパーカーを着て行動を起こすほうが「白い友達」ですよ。どうやら彼の本名もわかってきた、とか、そういう感じで。彼も「鮫島事件」に絡んできていますよね。少しずつ、そいつの正体や生い立ちがわかってきているかな、という印象で。そして、ぜんぶで事件は6つあるんですか。

流水: そのようです。ただ、今回は分割の可能性もあるので、最終的な巻数がどうなるかは、まだわかりません。

工刀: あと事件2つで全容がわかるんだろうな、と期待しています。誰が黒幕なのか、まだハッキリしていない部分も多いです。全体の40%くらいは見えてきたかな、という気がします。

ターニャ: 表紙には触れなくて良い?

流水: そうだね。表紙は今回も竹内麻喜さんによるものです。独特のタッチで好きなんですけど、今回も、とても印象的で。表紙に「ヨナ」(Jonah)という文字が隠されているのは気づきましたか?

工刀: はい、気づきました!

秋月: しまった……気づかなかったな……。

流水: 牛の顔と、ヨナの文字が隠されているんです。J-O-N-A-Hで、ヨナです。

ターニャ: ジョナ、じゃなくて、ヨナなんだよね。

流水: 旧約聖書に「ヨナ記」がありますが、そのヨナです。作中でも、その話が出てきますからね。

秋月: そうですね。

ターニャ: 素敵なイラストですよ。

流水: こういう小ネタは、言わないと気づかれないことも多いので、触れておきたいですね。

工刀: そうですね。せっかくの仕掛けですからね。ひとことでも触れたほうが良いと思います。

6. 短編集『Seven Stories』と『スカイ・クロラ』



流水: 続いては、森博嗣さんのお話に移りたいと思います。森さんは Amazon から「殿堂入り著者」に選ばれたほどの日本を代表する人気作家さんですが、トップランナーとして The BBB も牽引してくださっています。英語の有料作品は、森作品が上位を独占していますので、The BBB としても、本当にありがたい存在です。森さんの作品は 2013 年から The BBB で刊行させていただいていて、その当時から決まっていたことなのですが、今年 3 月に『Which Is the Witch?』という 7 作目の短編を刊行する運びとなり、それに合わせて、これまでに発表した 7 つの短編が『Seven Stories』という作品集にまとまりました。そのように、今までは短編を発表していたわけですが、短編集ともなると、紙の本とも遜色ないそれなりの分量になりますので、ここまで辿りつけたことが感慨深かったです。この短編集のラストでは、英訳者／編集者の立場から、ぼくが解説を英語で書かせていただきました。また、購入者特典として、電子書籍の購入画面を The BBB に送っていただければ解説の日本語版をプレゼントします、という企画を試してみたところ、けっこうたくさんの方がメールくださって、嬉しかったです。こういう機会でもない、ふだん読者からメールいただくことはあまりないので、特典を用意して良かったです。この短編集『Seven Stories』を刊行して間もない 2016 年 4 月 5 日、森さんのデビュー 20 周年の記念日に、代表作『スカイ・クロラ』の英語版を The BBB から刊行すると発表した時には、「驚きました！」という声が、直接的、間接的に、たくさん寄せられました。



秋月: 私も、聞いていませんでしたので、たしかに、驚きました。既存の代表作の英語版を The BBB から出せちゃうんだ、と。出版社の権利面とか、そっちのハードルが高そうな印象があるのですが……。

流水: 森さんのご協力のおかげで、実現した夢のような企画です。2016年の The BBB は、桜井亜美さんと久保マサヒデさんの企画、それに、森さんの『スカイ・クロラ』は、The BBB として、かなり新しい挑戦ができたと思います。これらの企画は、ねらったわけではなく、たまたま時期が重なったものなんです。

工刀: 濃い企画があまりにも重なりすぎたので、流水さんと私が物理的に悲鳴をあげることになったわけですね。夜逃げを検討するほどに……。

流水: 森さんの作品はスケジュール通りだったのですが、桜井さんと久保さんの企画が突発的に入ってきたので、その影響が大きかったですね。桜井さんは当初予定されていた映画化のタイミングに合わせる必要がありましたし、久保さんは闘病中なので一刻も早く、ということで、どちらも時期をズラせなかったのです。

秋月: それだけ重なるというのは、何か運命的な流れがあるんでしょうね。森さんも桜井さんも、流水さんと同じく 2016 年に 20 周年だというのも、運命を感じます……。

流水: さすが、スピリチュアル担当の秋月さんらしいご意見ですね（笑）。脱線しましたが、話を戻しますと、『スカイ・クロラ』は、著作数 300 冊に迫りつつある森さんが、みずから「最高傑作」と認めてらっしゃる唯一の作品なんです。つまり、日本を代表する人気作家・森博嗣さんの著作 300 冊の頂点です。この作品は、世界に知られた巨匠である押井守監督によってアニメーション映画化されて、セールス的にも大ベストセラーとなりました。そのように日本出版界で商業的に大成功し、押井監督の映画で世界にも既に存在を知られた最高傑作が The BBB から出る、という意味は、はかり知れないくらい巨（おお）きなことです。

工刀: 本当に意味の巨きなことだと、私も感じます。

流水: 刊行後も本当に反響が大きく、海外の読者からも「続きは、いつ出るんだ」というメールを何通もいただいています。これだけ海外から反響がある作品は、The BBB としては、もちろん初めてです。

ターニャ: わたしは、デザインする側なので、素敵な表紙イラストに魅了されます。『Seven Stories』と英語版『スカイ・クロラ』は、特に表紙が素晴らしいと思います。

流水: 『Seven Stories』の表紙は、森さんの奥様でもあるイラストレーター・ささきすばるさんによるものですね。この表紙は、本当にアイ・キャッチングで、ぼくも大好きです。英語版『スカイ・クロラ』の表紙は、謎の mm さんという方で。mm さんは別名義でも活動されていて、今回、森さんからのご推薦で、表紙を描いていただけることになりました。とても雰囲気のある絵で、作品世界にもマッチしていると思います。凄い才能ですよ。

ターニャ: この『スカイ・クロラ』の表紙は油彩なんですか？水彩？

流水: それについて、ぼくも驚いたんですが、CG らしいんです。

ターニャ: え？ほんとに？

流水: ぼくも驚きました。どう見ても手描きなんですけど、CG らしくて。

ターニャ: 作品内容については、わたしたちが改めて語るまでもなく、素晴らしいです。

流水: 秋月さんはメフィスト賞という新人賞の第20回の受賞者ですので、第1回メフィスト賞受賞の森博嗣さんには、特別な思い出がおありなんじゃないですか？

秋月: そうですね。自分の場合、最初に（第0回メフィスト賞とも言われる）京極夏彦さんの小説にハマって、その後、森さんを読んで、流水さんを読んで、いろいろメフィスト賞の方を読んで応募しましたからね。

工刀: あ、そうなんですね。

ターニャ: 不思議なつながりですね。

秋月: メフィスト賞という新人賞は、雑誌の後ろに座談会があって、応募すると落選しても必ずコメントがもらえたんです。そのおかげで、次に何を直せばいいかわかるんです。だから、まずデビューした人の本を読んで、その後、コメントを読んで傾向と対策を考える、みたいな感じで応募して、受賞することができました。他の新人賞だと、落選した時に、どこが悪いのか、わからないんです。メフィスト賞は欠点を指摘してくれるので、そこが良かったです。

流水: なるほど。森さんと言えば、第1回メフィスト賞で、今、The BBB でご自分の作品と並んでいることに感慨ありますか？

秋月: それはありますね。メフィスト賞の集まりで、一度だけ、お会いしたこともあります。気さくで、穏やかそうな方で、イメージと違ったんですが。

工刀: 森さんと言うと、怖そうなイメージが私にはあります。

流水: あの日、森さんの機嫌が良かったかもしれないですね（笑）。

秋月: そうなんですか？

流水: 本来の森さんは、戦国武将みたいな一面もあると思います。作戦に失敗したら首を斬られる、みたいな。

工刀: 怖え！

流水: 森さんは、おやさしいんですが、ただやさしいだけの方でもないですね。森さんにとって大切なルールを守れる人には限りなくやさしいですけど、変なミスをする人には容赦ない一面も、あると思います。

ターニャ: それは、編集者が悪いと思う。社会人として基本的なことが求められているだけ。

工刀: 怖えよ……。

流水: それは抜きにして、工刀さんの森さんの印象は？

工刀: 特に『スカイ・クロラ』で思ったのですが、私が校正していて重要だと思ったのは、英語力うんぬんよりも、私は一応、アメリカのサイエンスに強い大学で物理学を専攻していましたので、その経験は良かったかと思いました。やっと役立った、みたいな。

流水: もちろん、それはあると思います。

工刀: 仮に私が文学専攻でサイエンスをまったく勉強していなかったら、この校正は難しかったと思います。

流水: たしかに、専門的な知識は、けっこう出てきますからね。

工刀: 航空力学とか航空系の本、用語辞典なども何冊も買って、手元に置いています。英語力以外の能力のほうが、より試されたとは思っています。もちろん、『Seven Stories』の各作品でも試されましたが。一般的に、小説家というのは、科学系や技術系は、からっきしというパターンも多いはずですが、森さんに関しては逆です。ところで、流水さんは、たしか、森さんの登場人物をクールと評されていましたよね。

流水: そうですね。カッコイイ、という意味のクールというか……ある意味では冷めてる。

ターニャ: 理知的、ということ？感情が欠落している？

流水: 良い意味で、欠落していると思います。

ターニャ: 達観している？

工刀: 単純にクールとだけ評すると、誤解を招きそうですね。一言で表現できない程に奥が深いから小説なのでしょう。

流水: そのように誤読されかねない部分にまであえて切り込むのが、森作品の魅力ですよ。そこが、森さんのスタイルのクールなところで。人間を人形的に捉えてらっしゃるんじゃないかと、個人的には思っています。森さんのそうした“まなざし”がクールなのです。

ターニャ: 人工智能っぽい感じかな。世界がぜんぶ公式、みたいな。人の動きもシステム化されているような、そういう世界という印象があります。

工刀: あー、なるほど。今、ようやく腑に落ちた気がします。

流水: ぼくがクールだと評したのは、他者を人形的に捉えられる森さんの怜悯なまなざしのことなんです。そこが凄いなど。

工刀: たしかに、そうですね。

流水: 『スカイ・クロラ』の校正時に工刀さんから飛行機の描写に関して質問を受けた際、森さんにお聞きしたんですが、その時、森さんの解説が微塵も澱みなくて、森さんの頭の中では完璧に世界が構築されていることが理解できて、それが個人的には勉強になりました。

工刀: それは、私も感じました。「昔に書いたことだから、忘れた」という返答も予想できましたが、まったく迷いのないご返答をいただきましたね。

ターニャ: それは、どういう質問だったの？

流水: 航空機の操作と、機体の状態についてのご質問でした。この場面での旋回は180度ですか、360度ですか、といった、かなり細かい疑問についてで。エレベータを上げるんですか、下げるんですか、と、ご質問した時の答えが、まったく澱みなくて。なるほど、と思わされる解説が返ってきたんです。でしたよね、工刀さん？

工刀: ええ、この時、コックピットは上向きなのか、下向きなのか、とか。

流水: そう。ここで飛行機が裏返っているのはおかしくないでしょうか、と、お聞きしたら、見事に解説されて、疑問が晴れたんです。

工刀: たとえば、上のほうから敵の戦闘機が迫ってきた、という描写があった時、「上のほうから」というのは、つまり、地面の反対という意味での「上」とは限らないんです。パイロットから見て上で、パイロットが上下逆だったら、地面のほうから攻めてきても「上」となる、という解説もいただきましたね。なるほど、と思ったことを、よくおぼえています。

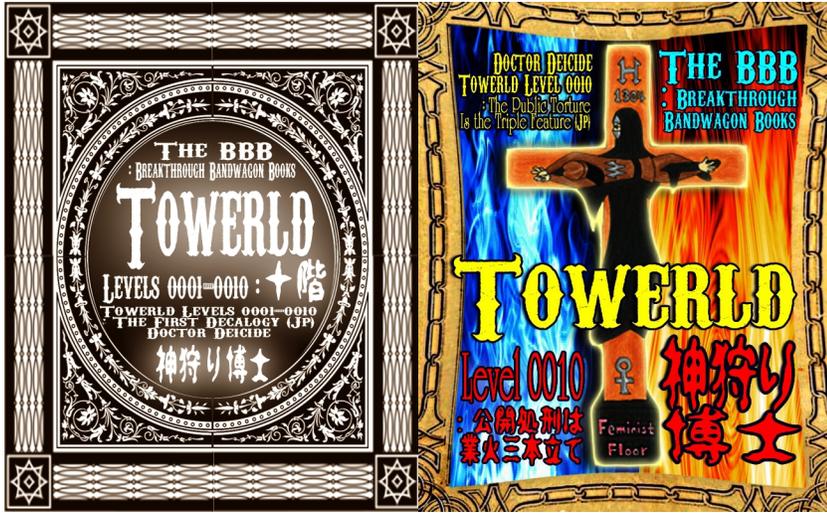
流水: 森さんの頭の中では本当に精巧につくられているんだな、ということがわかりました。細部に至るまで、まったく矛盾がない、と言いますか。あれは、作家として、ふつうに勉強になりました。

工刀: そうでしょうね。私は著者ではないですが、それでも勉強になりました。

流水: それと、予告ですが、2017年2月末に『スカイ・クロラ』3分冊の3冊目を刊行するのに合わせて、3冊を1冊にまとめた合本も刊行する予定です。その、『スカイ・クロラ』合本の巻末には、森博嗣さんインタビューも収録させていただく予定となっています。インタビューは既に収録済みです。

秋月: それは、楽しみですですね。

7. 前人未到の領域を切り拓き続ける『Towerld』



流水: 今年の座談会も、だいぶ佳境を迎えつつありますね。あとは、『Towerld』と『The Gifted』を残すのみとなりました。本日は、秋月さんはスペシャル・ゲストとしてご参加いただいていますので、『The Gifted』の話は最後にしたいと思います。

秋月: え、私が最後ですか……どきどき……。

流水: 『Towerld』からお話ししたいと思います。『Towerld』は、今年は Level 0010 まで到達した節目で、そこで、神狩り博士がつけた「The First Decalogy」（最初の 10 部作）というタイトルの合本も刊行しました。「decalogy」というのは一応、造語なんですよ？

工刀: SF 作家の L・ロン・ハバード (L. Ron Hubbard) が、何十年前につくった造語ですね。私は著者ではないので、検索して知ったのですが。

流水: 10 部作ですが、ここで完結ではなく、当然、今後も続いていくわけで、この「Cast Party 2016」と同時期に Level 0012 も出ているはずですけど。工刀さんが、神狩り博士からのメールをちゃんとチェックしていれば、ですが……。

工刀: うっ……いや、はい、そうですね。メールはチェックしないとね。

流水: Level 0010 で特筆すべき点としては、作中に登場する歌姫—「弦姫 (つるひめ)」様—の歌と演奏が The BBB サイトから無料ダウンロード可能になったことですね。ちなみに、あの音源は、工刀さんは、どのように入手されたんですか？あれも、神狩り博士からメールで送られてきたんですか？神狩り博士がボカロやってたのか、という話になりますけど……。

工刀: い、いや、あれは、「弦姫」様が……。

ターニャ: 「弦姫」様からメールが来たんですか？

流水: 登場人物からメールが来た？

工刀: まあ、本物かどうかは知らないですが、メールには「弦姫」と書いてあった気がします。

流水: じゃあ、「弦姫」様からあの音源が送られてきたんですね？

工刀: 私も、メールで「弦姫」と名乗っている人物の正体は知りません。

秋月：それも、凄い話ですね（笑）。

流水：経緯はともかく（笑）、あの歌と演奏は、Level 0001 から 0010 までのストーリーがすべて盛り込まれていて、本当に感動しました。読者がダウンロードできる歌と演奏が、作中にも、そのまま出てくるわけですからね。

工刀：そうですね。まずは、音楽をダウンロードできる、と気づいてくれている人が何人いるか、ですよ。

流水：それは機会があるごとにアナウンスしているんですが、このキャスパでも強調しておいたほうがいいでしょうね。

ターニャ：皆さ〜ん、The BBB サイトから、音楽も無料ダウンロードできます！

工刀：日本語版と英語版、両方ありますからね。

流水：ダウンロードしなくても、サイト上でボタンを押すだけで聴けますしね。ダウンロードしていただくと、iPhone では歌詞も表示されます。

工刀：そうですね。誰が入力したか知りませんが、丁寧に仕事してくれたもんですね。

ターニャ：ほんと、親切設計です。

流水：あれは、小説本編を読んでないとピンとこない歌詞かもしれませんが、読んでると、それぞれの場面がよみがえってきて、本当に感慨深かったです。秋月さんは、どうでした？

秋月：まず、曲をつくれるのが凄いな、と思って。まあ、つくったのは「弦姫」様なのでしょうが。今まで 10 巻ぶんの印象的な場面をことごとく歌詞が網羅していて、凄いなと思いました。

工刀：何か要望はありましたか？もっと楽器を増やして欲しい、とか。あれについては、「弦姫」様がひとりで、いろんな楽器を操っているわけですが。

流水：そうですね。作中の描写を再現していますよね。アコーディオンに持ち替えたところでは、本当に、アコーディオンに切り替わったり、とか。小説と音楽が完璧に連動する、世界でも最先端の試みだと思います。

秋月：最初、「え、歌があるんですか？誰が歌うんですか？」と思ったんですが。まさか、ボカロとは思わなかったです。

工刀：ボカロ？

秋月：え、あれは、「弦姫」様が歌ってるんですか？

流水：あれは、「弦姫」様でしょう。まさか、ボカロのはずがないですよ。

秋月：さっき、神狩り博士がボカロを、って言ってませんでしたっけ？（笑）

工刀：でも、私の印象としては、「弦姫」様です。あれは。

秋月：そうなんですね。すみません、失言でした……。

工刀：でも、たしかに、声の質は、それっぽかったかもしれない。

流水: ここでおさらいすると、『Towerld』の Level 0001 から 0003 は無料でダウンロードいただけますし、Level 0004 以降は有料ですが、この Level 0010 までの合本は 10 冊ぶんを 1 冊にしていますので、そちらは価格的にもリーズナブルです。合本を読むと一気に追いつけるのが良いですね。ぼくも、入魂の解説を書かせていただきました。

ターニャ: 10 冊ぶんの合本、というのは、贅沢ですよ。

流水: 『Towerld』は、このキャスパが世に出る頃には Level 0012 まで出ているはずで、まだ読んでいない方は、「12 冊も読めない」と思うかもしれません。でも、合本を読めば、いきなり、ほぼ追いつけるんです。

工刀: ただ、追いつこうとする人たちは、もしかして、つまみ読みだけしたいのかもしれない。もしかして、求めているのは合本より総集編だったりして。

流水: その可能性は否定できないです。The BBB 作品の中で、シリーズが 3 冊無料になっているのは、小説では『Towerld』だけなんです。先日も工刀さんにお話ししたのですが、実は、かなり不思議な現象が起きていて、いちばんダウンロードされているのは当然、Level 0001 ですが、その次が、Level 0003 なんです。ダウンロードの順番で言うと、0001、0003、0002 の順なんです。先日も工刀さんと意見交換したのですが、読者は 0001 を読んだ後に、0002 を読むのが面倒臭かったんじゃないかと。

秋月: え、そうなんですか!?

流水: 0003 を読めば 0002 もわかるだろう、ということなのかな。あるいは、0003 が単体として魅力的に思えたのか。秋月さんは、どう思います？

秋月: 0002 を飛ばすかなー？

流水: 0002 を飛ばすのは、気持ち悪いですよ？

秋月: それは気持ち悪いですけどね。

ターニャ: 0002 の存在に気づかない、ということも、ありえないはずですし。

秋月: 小リス師匠が出てくる巻なのに……そこ、飛ばしちゃダメですよ。

流水: でも、数字の上では飛ばされてるんですよ。

ターニャ: Amazon でエラーしてるのか？

流水: いや、それはないと思う。もしかしたら、0003 のタイトルが魅力的だったのかな、とは思っていて。実は以前、工刀さんを通じて神狩り博士に疑問を呈したことがあるんです。0003 のタイトルの Theriocephalic Thugs (獣頭兵団) という単語は難しすぎないですか、と。でも、もしかしたら、逆にそれが魅力的だったのかな、とも思ったり。というのは、以前、『Towerld』の Level 0008 だけ突然、売れたこともあるんです。それはたぶん、タイトルの「バリアフリー旅団」が興味を引いたと思うんです。もしかしたら、『Towerld』は 0003 のタイトルが「麻薬王と歌姫と獣頭兵団」と扇情的で、0002 よりダウンロードされているのかな、と。

工刀: やっぱり、タイトルは大事ですね。なんだかんだ言って。

ターニャ: タイトルの「ドラッグ」が効いたんじゃない？

流水: Drug Lord (麻薬王) が読者を惹きつけてるのかな？

秋月: 強い言葉であるのは間違いないです。

流水: たしかに、「麻薬王と歌姫と獣頭兵団」って、扇情的ですよ。

ターニャ: だって、「ドラッグ」に「ディーバ」でしょ？それは、気になるよ。

流水: やっぱ、タイトルかな……。

ターニャ: Level 0002 は「郵便」だからね。

流水: 「郵便少女」は、ちょっと弱かったか……個人的には、好きなんだけど。意味がわからない人も多かったかな。

ターニャ: ペンパル (文通友達) みたいに思われたとか？

流水: たしかに、Drug Lord と比べると、牧歌的だよ。そのやばさの差かな。

工刀: やっぱ、そこですかね。

流水: 言われてみれば、0001 のタイトル「Escape from the Flooded Floor」(浸水階層からの脱出) も、凄く冒険の予感がするけど、「郵便少女」は急に、ほのぼのしている感じはあるかもしれない。

ターニャ: ペンパルだよ。やっぱり。

流水: そう考えると、Level 0010 の「公開処刑は業火三本立て」とかも、かなり扇情的ですよ。

秋月: そうとうインパクトありますよね。自分は、タイトルと表紙のテンションの高さだけで、びびりましたよ。Level 0010 は。

流水: 『Towerld』に限らないですけど、無料の巻は拡散し続けている一方で、なかなか有料は伸びなくて。他のシリーズも同様ですが。毎年、キャスパで話しますが、無料と有料の壁は厚いですね。まあ、あたりまえなんですけど。

秋月: ですよ。

流水: われわれでも、たとえば、無料アプリを優先するのは当然で、有料だと躊躇しますよね。課金は嫌だという人間心理はありますよね。

ターニャ: 各巻の前半を無料、後半を有料にするとか。

流水: 先ほど工刀さんがおっしゃった総集編をつくって、無料を出してみるとか。『Towerld』だけでなく、『The Gifted』も『都市伝説刑事』も、巻を追うごとにどんどん面白くなって……でも、無料の最初の巻で止まっている読者には、それはわからないことで。

工刀: 売る時に、食玩じゃないけど、おまけをうまく絡めるとか。たとえば、「弦姫」様の楽曲にしても、あれだけダウンロードしても、そこで終わっちゃうんですよ。それを、たとえば、本を買わないとダウンロードできない、とすれば。

流水: そうすると、「買わない」となりますよね。

ターニャ: そうかな。あらすじのところに、この本を読んだ人には、おまけがあるよと書いておいて、本文の中にリンク先の URL を書いておくとか。

流水: それ、実は桜井さんの作品でやっていて。作品の中にパスワードを書いていて、購入者がパスワードを特設ページに入力すると女子高生の御礼の動画を観ることができる、という趣向を既にやっているんです。これは、ただ、まだあまり効果を発揮していません。ところで、今年のキャスパでは、音声を聴いてくださった秋月さんから「工刀さん、いい声ですね」というご指摘があって。それで思いついた企画なんですが、このキャスパが世に出る頃には、『Towerld Level 0001』のオーディオブックも無料で入手可能になっているはずです。

eBookの最後に記入されている
秘密のパスワードをご入力頂くと
女子高生たちの特別動画を
御覧いただけます。



[購入者特典ページへ](#)

Haya、Emery、Hinako
3名の内、1人が
ランダムで表示されます。

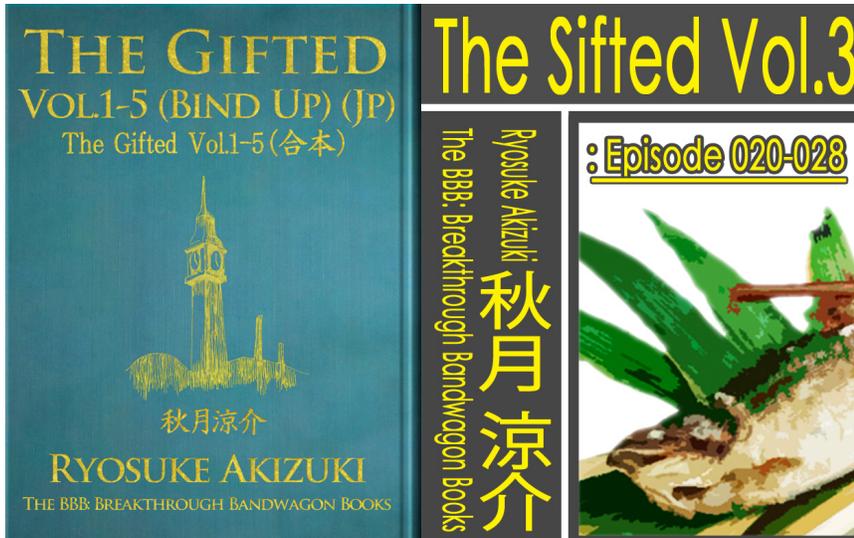
(購入者は何度でも表示できます)



秋月: おおっ！それは、楽しみですね。

流水: 『Towerld』と『The Gifted』で共通の話題や課題も多いので、そろそろ『The Gifted』の話にも入りたいと思います。

8. 『The Gifted』と『The Sifted』の広がり



流水: 秋月さんにお書きいただいている『The Gifted』と『The Sifted』も、課題ということでは、『Towerld』と、まったく同じなんですよ。『The Gifted』も、先ほどお話ししましたように、無料のVol.1は、The BBB全体で3位という素晴らしいダウンロード実績があるのですが、なかなか有料のVol.2に読者が進んでくださらないので。それで、秋月さんにご相談して、スピンオフの『The Sifted』という食リポ連載をしていただくことになったわけです。『The Sifted』は、美味しそうな食事を毎回扱っていますので、小説より敷居は低いと思います。実際、広くダウンロードされつつありますし。秋月さんは、著者のお立場から、『The Gifted』と『The Sifted』について、どのようなお考えをお持ちですか？

秋月: 考えですか、うーん、なんだろう……。

流水: 補足としては、『The Gifted』も、Vol.1から5までを1冊にまとめた合本を、2016年に刊行させていただきました。紙の愛蔵版のような素敵な表紙を、画家の佐久間真人（さくま・まこと）さんがつくってくださいました。仕掛けとして、日本語版の合本は表紙が右開き、英語版は左開きに見えるようになっています。

ターニャ: 芸が細かい！佐久間さんの絵は、いつも素敵な仕掛けがありますね。

流水: あ、ちなみに、佐久間さんは、思いつきりキヤット・パーソンです。毎年、猫を題材にした個展を銀座で開催されています。

工刀: 猫派の仲間も、けっこういて良かった……。ところで、秋月さんがいちばん好きな食べ物は何か？『The Sifted』を拝見して、ラーメンなのかな、と、勝手に思っているんですけども。

秋月: 元々は、ラーメンがいちばん好きでした。最近は、お寿司にもハマっていて。

工刀: ラーメンの場合は、お店に入りやすい、ということもあるんですよ。

秋月: 『The Sifted』を始める前は、食べ歩きは、ほぼラーメンだけだったんです。一時期、ドイツにいた頃はレストランにはけっこう入っていたんですが、日本だと、わりとラーメンが多くて。ラーメン屋さんは、今、260軒くらい行ってるんですが。

工刀: につ……260 軒!

流水: それは多いですね。ぼくは全人生を通して、ぜんぶで 10 軒くらいだと思います。

秋月: 和食だと、50 店くらいしか行ってないんですが。

工刀: それも十分に多いと思いますよ。

秋月: イタリアンは 32 店です。

工刀: 約 30 店じゃなく、32 店と言い切れるのが凄い。

秋月: 記録していますからね。

工刀: 『The Gifted』に出てくるミロもラーメン好きですよ。

秋月: ですね。

流水: 『The Sifted』は、主要キャラごとに料理の担当を分けたのが面白いですよ。ミロはラーメン、サヤは和食、クロエは洋食、リカルドは中華、ヨマはカレー、というふうに。

秋月: そのほうが書きやすいかな、と思ったんです。実際、作中での好みは少し違ってはいるんですけど、『The Sifted』では担当を決めてみました。ミロは『The Gifted』のほうでもラーメン好きで、お気に入りのラーメン屋がシティに何軒かあることになっています。

工刀: シティ自体に、ラーメン屋が何軒もあるんですね。

秋月: はい。今、少なくとも 2 軒はありますね。

工刀: そっちの数字も把握してらっしゃるんですね (笑)。やはり。

秋月: シティは、ミュンヘンをベースにしまして、ミュンヘンのこの位置にラーメン屋、この位置にインド料理屋とか、メモってあって。そのメモで、いろいろお店を配置してあります。

工刀: なるほど、そのように世界がきっちり構築されているんですね。

流水: 先ほどの森さんの話じゃないですけど、作家さんの頭の中では、設定がしっかりできているんですね。

秋月: しっかり、ではないんですが。ざっくり、できています (笑)。

ターニャ: ミュンヘン、というベースがあると、わたしたちも映像が浮かびやすいです。

工刀: 森さんの作品も、ゲームの『スカイ・クロラ』をプレイしていて思ったんですが、あの地図はヨーロッパをベースにしているらしい、というのは思いましたし。ベースにできる世界があったほうがいいんですかね。『Towerld』には、そういうベースはないと思うんですが。

秋月: 『Towerld』は、きっと、最初から階層をすべて設計されているんですよ。

工刀: しているのかな? 神狩り博士は……。

秋月: いや、わかんないです。ただ、ラストが構想されていて、そこに向かっているのかな、と、勝手に思っていたので。

工刀: もしかして、実は構想がなかった、とか……自然現象やら森羅万象のうんたらかんたら、だし。

秋月: 自然現象から生み出されているなら、それはあるかもしれないですね (笑)。最初は Level 0001、0002 というのは階層に対応していると思っていたんです。毎回、1階ずつ上っていくのかな、と。

流水: 少なくとも最初は、その予定だったんじゃないですかね。神狩り博士の意図は、われわれにはわかりませんが。

秋月: ですよ。なので、上らない巻があった時には驚きました。

工刀: それどころか、階層を下がったりもしてるし。エージェントである私も、あの展開には驚きましたよ。え、下がっちゃうの!? って (笑)。

秋月: わからないですけど、数字が4ケタなので、ぜんぶで1000階か9999階はあるのかな、と。

流水: 1000と9999では、だいぶ違いますね (笑)。

ターニャ: 10倍くらい違うね。

工刀: 話題がまた『Towerld』になってしまっていますが、『Towerld』と『The Gifted』のクロスオーバーとかは、ありなんですかね? 『The Gifted』に出てくる能力で「異世界(エイリアン)エレベーター」ってあるじゃないですか。時々、私、妄想するんですよ。とあるところでエレベーターが止まって、開けたら『Towerld』の世界だった、とか。

秋月: ありえますね。あの能力は、違う宇宙にも、つながっているはずなので。

工刀: 違う宇宙ということは、『Towerld』の可能性もありますよね。

秋月: ありますね。

流水: そういう試みができたら、最高に面白いですね。

工刀: 『Towerld』の最初の巻で、表紙にも描かれている場面ですが、「階段衛兵」が守っているあの扉は、「異世界エレベーター」だったんじゃないか、などと妄想は膨らみます。

流水: おおっ、それは面白い!

工刀: まあ、今頃、あの階層は水浸しになってるかもしれないですが。

秋月: どのくらいの速度で浸水が進んでいるのかな、というのは思いました。あそこに住んでいる人たちもいるけど、どうなっちゃうのかなー、と。

工刀: 今頃は溺死ですかね。浸水している下の階層にも誰が住んでいるのかな、ということも気になります。

秋月: そうですね。浸水階層で漁師をやっていた人たちは、上の階層に逃げたら、どうするんだろう。

ターニャ: 転職するんじゃないの?

秋月：魚の供給が止まってしまうのか、とか。

工刀：そのあたりも、だんだん明かされていくんじゃないでしょうか。

流水：神狩り博士の思惑は誰にもわからないですが、秋月さんの場合、『The Gifted』のゴールはあるんですか？

秋月：ないです（キッパリ）。

工刀：黒幕みたいなのは、いないんですか？『都市伝説刑事』の「白い友達」「黒い友達」じゃないですけど、裏で操っている奴は……。

流水：今のところ、そういう奴は見当たらないですね。

秋月：いないんですけど、能力次第では、支配欲の強い奴が出てきたら傘下を増やして、となるかもしれませんが。今は1話完結スタイルでやっているの、そこまではまだ考えていません。

工刀：1話完結とシリーズ物、それぞれ強みがありますよね。たとえば、TVドラマとかでも、そうですけど。どっちが良い悪いはないですよ。

流水：『The Gifted』は、どの作品からでも読めますけれど、読者からすると、順番に読まないといけない、という思い込みはあるでしょうね。いきなりVol.5から読む、という人は、なかなかいないかもしれません。個人的に、『The Gifted Vol.5』は本当に凄い作品だと思っていますので、Vol.5だけでも読んでいただきたいくらいです。

ターニャ：Vol.2、3、4も読んでほしい！合本だと、ぜんぶ読めるので、今から読まれる方にはオススメです。

秋月：一応、前のエピソードの話題とかも、少しずつ出てきますからね。あの世界では時間が流れていて、学年も変わったりする予定なので。少しずつ成長しています。

流水：ひと月に事件ひとつですよ？

ターニャ：毎月事件って、かなり濃い学生生活……（笑）。

秋月：あまり間隔を空けると、ミロとサヤが大学生になるとか、就職させないといけなくなるので。

ターニャ：それはそれで読んでみたい！

流水：つまり、ほぼ毎日、何か事件が起きている感じですよ。

秋月：ひとつの事件が始まっている裏で、もう何かが動いている感じですね。この事件がここで起きるには、前の事件が解決する前に動いてないといけないので。

工刀：同時進行で、いろいろ起きているんですね。ますます濃い世界だ……。

秋月：事件が発覚するのって、何人か犠牲者が出ないとわかりませんから、時間がかかるんです。

流水：なるほど。ところで、今年の座談会もだいぶ長くなってきましたので、そろそろ少しずつ、まとめに入りたいと思います。

9. The BBB の 2017 年の新展開について

流水: 『The Sifted』の食レポで興味を持って、『The Gifted』に入ってくれている読者も多いと思います。『The Sifted』の新刊を出すと、『The Gifted』の Vol.1 も必ず動きますからね。でも、Vol.2 には、なかなか進んでもらえないんです。これを何とかしたいんですけど、秋月さんの中で、何かありますか？

秋月: 実は、Vol.1 のラストが良くなかったのかな、とは思っています。ちょっとダークすぎたかな、と。

流水: Vol.1 の時点では、まだあのシリーズの魅力や可能性が、ぜんぜん伝わっていないと思うんです。『Towerld』も Level 0003 までだとわからないのと一緒で。その後どんどん面白くなっているのを知っている身としては、あそこで止まってしまうのがもったいない、という気持ちが強くあります。両シリーズとも合本を出した今だからこそ、何とか読者の皆様に興味を持っていただきたいです。毎年、同じ話題になるので、何とか打開策を見つけないといけないところですが。何も対策しないのは生産的ではないですからね。

工刀: The BBB のサウンドトラックとか、出してみたいですけどね。

流水: そう言えば、工刀さんは以前、「秋月さんは『The Gifted』の登場人物にバンドを組ませる気はないのかな」というお話もされていましたね。そういう音楽を実際につくれるなら、面白いかもしれませんね。The Gifted Band みたいな。名前、カッコイイですね。どこかにいそう。

ターニャ: それは楽しそう！わたしもピアノの演奏で参加したいかも。

工刀: 秋月さんは、そのようなことを考えたことはありますか？

秋月: いやー、バンドって、どうすればいいかも、わかりません。

流水: 秋月さんが熱唱する、とか（笑）。

秋月: いやいやいや（笑）。もしやるなら、ボーカルはサヤでしょう。

流水: 今年はピコ太郎さんの「PPAP (Pen-Pineapple-Apple-Pen)」が全世界的に大ブレイクしましたが、きっかけとしては、ああいうタイプのコンテンツがあっても良いとは思っています。不思議な動画があって、そこから『The Gifted』や『Towerld』に関心を持っていただく、というような。

工刀: 中毒性の高い曲、ということですね。単に良い曲ということではなく、思わず口ずさんでしまうような。

流水: 工刀さんが The BBB のサウンドトラックをやりたい、というお話をしてくださいましたが、それが中毒性のあるテーマ曲であれば、やる意味はあるかもしれません。小説の続きが読みたくなる曲、とか。無茶ぶりですけど（笑）。

工刀: メールで「弦姫」と名乗っている謎の人物に、お願いしてみることは可能ですね。誰か知りませんので、やってくれるか、わかりませんが。でも、中毒性の高い曲って、実際ありますよね。1回しか聞いたことないのに、いつの間にか口ずさんでしまっていたりとか。そうい

う曲の共通点って、どうも同じ単語の繰り返しであることが多いような気がします。『崖の上のポニョ』の曲とか。

流水: あれは、たしか、ポニョポニョ言ってますよね。

工刀: ベビーメタルでも、ギミギミと繰り返す歌があったような気がします。

流水: では、タワタワタワ、タワールドとか、ギフギフギフ、ギフティッド、とかですかね。

秋月: ギフギフって……（笑）。

工刀: 中毒性の高い曲って、同じ言葉を繰り返していて、ハタから見ると間抜けに聞こえるけど……。

ターニャ: 耳に残った者勝ちですよ。

工刀: 耳と記憶に残って、思わず口が動いたら、その音楽の勝ちでしょうね。

流水: それは、可能であれば、アリだとは思いますがね。もしその謎の「弦姫」様がつくれれば、ですが。

工刀: ともかく、まずはメールでお願いするしかないですね。

流水: 先ほど、ストーリーのクロスオーバーの話も出ましたが、「弦姫」様が『The Gifted』のテーマをつくるとか。それは面白いかもしれないですね。

工刀: それも一瞬のクロスオーバーですね。たとえば、『Towerld』の世界では主人公の Hector が読書家のはずなので、『The Gifted』という古代文明の作品が出てくるとか。それを読んで「弦姫」様が作曲するとか。最初は『Towerld』の世界で、そしてこの読者の世界で。

流水: サウンドトラックが可能なら、いろいろ考えられるかもしれませんね。『The Gifted』のテーマ、『都市伝説刑事』のテーマとか。『スカイ・クロラ』は、版權の面で難しそうですが……。『The Gifted』は、秋月さんが OK なら OK ですよ。

秋月: もちろん、いいですよ。よくわからないですけど。

流水: あと、『The Gifted』の戦略としては、表紙絵を描いてくださっている佐久間真人さんのインタビューを2017年に刊行させていただく予定です。佐久間さんには、『The Gifted』も含めて、表紙絵の創作の秘密について語っていただく予定です。

ターニャ: 佐久間さんの創作の裏話は、ぜひ聴いてみたいですね。

流水: あと、妄想としては、神狩り博士インタビューも、いつかやってみたいです。工刀さんからメールで質問を送っていただいて、どのような答えが返ってくるのか、面白そうなので。それと、秋月さんとは冗談で、スピリチュアル・インタビューという企画を話すことはありませんけどね（笑）。

秋月: いや、誰もついてこれないんじゃないかと……（笑）。

流水: そのあたり、もし読者の皆様からリクエストがあれば、お気軽にご意見ください。本日は予想以上にいろいろお話しできて、気がつけば、去年よりだいぶ長くなってしまいました…

…だいぶ密度の濃い内容になったと思います。今年のキャスパの最後に、今後の活動への意気込みを、ひとことずつ伺いたいと思います。

工刀: 私は、エージェントですので意気込みといっても限られるのですが。

流水: 一生懸命にメールするとか？たしかに、工刀さんががんばっても、神狩り博士には関係ないわけですからね。

秋月: 私はマイペースで、淡々と、ですね。『The Gifted』の Vol.6 は 2017 月 1 月に出ると思うのですが、Vol.7 の内容が難しく、実は、けっこう苦戦しています。どうして良いかわからず、ずっと筆が止まってしまっています。

流水: 『The Sifted』のほうは、詰まることはないのですか？

秋月: だいぶお店のストックはできているので、気分的にラクです。ただ、英訳には時間がかかりますね。

ターニャ: わたしは、いつかキャスパは毎月配信できるといいな、と思っています。キャスパというか、The BBB Radio を。コスプレイヤー活動時代に、ネットラジオを配信していたこともあるので。

工刀: あ、それはいいですね！楽しそうです。毎月、ゲストを呼んだりとか？

流水: スケジュール調整が難しそうですが、可能なら、やってみたいですね。来年末の The BBB がどんなことになっているのかわかりませんが、読者の皆様、2017 年も、The BBB を、どうかよろしく願いいたします。本日は最後までお聴き（お読み）いただき、ありがとうございました。スペシャル・ゲストの秋月さん、そして、工刀さんとターニャも、ありがとうございました。

秋月・工刀・ターニャ: ありがとうございました！

（この「Cast Party 2016」は、The BBB: Breakthrough Bandwagon Books のオリジナル作品として、2016 年末に収録されました）
